

この学校は、
冒険に満ちている

屋根の上には吹く風は

授業も、テストも、クラスもない

鳥取県の山あいにある新田サドベリースクール

遊びだって生き方だって、自分で考え、自分で決める

子どもと大人の自由と葛藤の1年を追ったドキュメンタリー



ここは私たちが想像する「学校」とはちよつと違う

自由をめぐる、大人と子どもの葛藤と冒険のドキュメンタリー

生活のなかから“生きる”を学ぶ

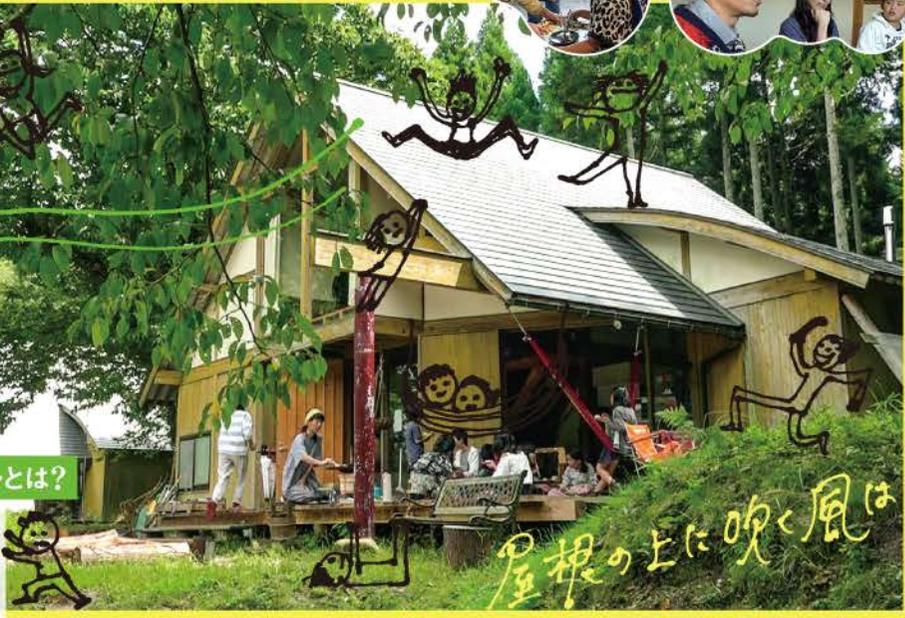
鳥取県智頭町にある新田サドベリースクール。
授業は行われておらず、子どもたちは朝からゲームや屋根登りに夢中だ。
子どもたちの“やりたい”を一番に尊重するこの学び舎では、ルール作りから全体運営まで、
すべて子どもたちが携わり、自分で考え判断し、解決する力を身につけていけるよう運営されている。
学年分けもなく、サポート役の大人も「先生」ではなく、子どもたちによって選ばれる「スタッフ」と呼び、
「今日1日、何をするのかしないのか」すべて子ども自身が決めていく。



新田サドベリースクールとは？

子どもの自主性を尊重した自由教育を実践する米国マサチューセッツ州のサドベリー・バレー・スクールをモデルに、地域の子育て中の親たちが中心となって2014年に開校したオルタナティブスクール。「民主主義の学校（デモクラティック・スクール）」でもあり、大人も子どもも対等に話し合う場作りをモットーに運営されている。国の認可校ではないものの、スクールの理念に惹かれた子どもから不登校だった子どもまで様々な生徒が在籍している。

※2021年現在、サドベリースクールは世界に約60校、日本では新田サドベリーが加盟する（デモクラティックスクールネットワーク）加盟9校のほか、部分的な取り入れ校も含め各地で様々な取り組みがなされている。



…だけど、自由とは何だろう？最初は楽しかったけれど、何もしなければただ退屈な時間だけが過ぎていく。子どもとスクールを信じつつも、時に一抹の不安を拭えない保護者たち。“黙って見守る”と“サポートする”の狭間で葛藤が絶えないスタッフたち。それでも大人は子どもたちの背中をそっと後押しする。「なんでもやってみたらいいよ」「みんなで話しあってみたら」根気のいる米作り、初めての喫茶店運営、私立中学受験への挑戦、そして、それぞれの思いが交差するスタッフ選挙——悪戦苦闘しながらもひとつひとつ取り組んでいく…案外、自由って難しい？「勉強もせず遊んどるがな。大丈夫かいな」近隣住民からの訝しげな視線もなんのその。豊かな自然の四季に囲まれて、歩き始めて間もない学校作りに奮闘する、大人と子どもの悲喜こもごもの一年を、長年テレビ業界で多くのドキュメンタリーを手がけてきた浅田さかえ（劇場公開初監督）が追いかけた。



監督・撮影・編集：浅田さかえ プロデューサー：日笠昭彦、西村陽一郎 音楽：原摩利彦 ナレーション：玉川砂記子
配給：グループ現代 製作著作：SAKAE ASADA 2021年 | 108分 | 日本 | カラー | ドキュメンタリー | DCP

<https://yane-ue.com> @yanekaze @yanekaze



第9回 殿町シネマ

2023年2月18日(土)

①10：30～*13:30 ゲストトーク 大西良(筑紫女学園大学准教授) ②14：20～
前売1000円(当日1200円) 高校生以下無料
会場：ユメニティのおがた小ホール(直方市山部364-4)
連絡先：090-5931-0548 (樋口) 主催：殿町シネマ実行委員会



貧困がもたらす「生きづらさ」

筑紫女子園大学 人間科学部人間科学科 准教授 大西 良

まずはじめに私が経験したエピソードをご紹介します。私がスクールカウンセラーとして勤めていた中学校で、ある男子生徒(中学3年生)との出会いがありました。ある日、彼がつかのようなことを話してくれました。

「先生、僕は中学校の3年間、最後までサッカーをしたかった。でもそれはできなかった。中学2年生の時、顧問の先生に「サッカー部の友達との人間関係が嫌で部活を辞めます」と伝えて退部したけど、本当の理由は、家に両親と一緒に練習をお金がかかるとか知らなかった。仕事を頑張っているお母さんとこれ以上のお金のご負担をかけたくなかった。誰にも相談できなくて結局、顧問の先生に嘘をついて辞めたんだ」

この話をしてくれた彼の表情は、私がいつも目にしてきたものとまったく別の表情がありました。この時の彼の言葉と表情は、今も私の心に焼きついてます。

子どもにとって、経済的理由で、あきらめるという経験は耐え難いものだと思います。たとえどんなに努力しても、いくら能力があっても、経済的理由で継続できない(続けるという選択ができない)ことは、無力感に襲われるのではないのでしょうか。また自分自身で、あきらめるという行為を選択することは、やがて「何をやっても無理」という感覚を生じさせ、努力する気持ちも後退させてしまうでしょう。自信や自己肯定感が低下し、「やればできる」「頑張ってみよう」という感情が乏しくなり、あきらめの連鎖が生じようになると思います。

さらに、このエピソードのように、経済的理由によって子どもたちは他人と比較して自分の置かれている状況が鮮明になることで、「自己嫌悪に陥り、強い劣等感や絶望感、将来に対しての「あきらめ」の気持ちを抱くようになると思います。そして地域のなかで孤立していることも少なくなく、非行やひきこもりなどの問題行動(子どもにとってはSOSのサイン)として現れることもあります。

このように貧困による不利の連鎖によって、子どもは様々な生きづらさを抱えることとなります。特に私は、子どもが将来の夢や希望を持ってない「あきらめ」や「意欲の欠如」などは大きな課題であると思います。貧困による不利の連鎖により、様々な機会チャンス(自分が得られない場合、したいに子どもは将来に夢や希望をもてなくなり、それらを叶えたい、実現させようという気持ちや「意欲」が湧かない状態になります。どうせ私ならぬが、「私には無理」という感覚に支配され、何に對しても早い段階であきらめるようになります。すなわち「あきらめ」が当たり前になります。この「あきらめ」は、その後の新たな機会チャンスへの意欲も失わせ、将来の夢や希望がなくなり、日常が無感動と無力感に支配され、閉塞的になっていくなかで様々な可能性を自ら潰していくセルフネガレクトの状態に陥っていくのです。

現在の日本は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響や物価高騰によって経済が大幅に下押しされ厳しい状況にあります。こうした不安定な社会情勢から生じる貧困によって生きづらさを抱き、多くの傷つきた不安定な社会から暮らしている子どもたちに対し、社会はもっと関心を持ち、社会全体で何ができるのか何をすべきなのかを考え、行動しなくてはならないと考えます。

まさに今、市民一人ひとりの貧困に対する関心と行動、そして社会のあり方が問われていると思います。

教育はだれのためにあるのか

殿町シネマ実行委員会代表 樋口 清

今日、教育についてさまざまな問題が指摘されています。不登校の子ども達の増加、いじめによる自殺、行き過ぎた校則、また教師の加重労働など、とりのりない教育現場や管理強化の現場の実態も明らかになっていきます。

今、学校という職場に魅力が感じられず、教員志願者は激減しています。また、学校現場に見切りをつけ早期退職する若者も多く、精神的負担から病休や休職に追い込まれる教員も増加しています。

団塊世代である私の学生時代を振り返って見ると、受験体制への不満は強いものがありました。が、中学、高校とも不登校やいじめはほとんど周囲には見当たらず、校則もゆるやかだったと思います。また、先生方も比較的穏やかに生活されていたように思えます。自習時間なども結構あり、学校の雰囲気は緩やかな感じでした。

私は、高度成長期に大学を卒業しましたが、「モーレツ社員」等のイメージがある会社勤めは敬遠し、学校の教員を志望しました。教育実習での子ども達とのふれあい、授業や部活動など、囚われることなく活動できる点に魅力を感じました。

35年の教員生活の最初と最後は奇しくも定時制高校でした。新規採用された定時制高校は定員割れしており、全員入学、ほとんどが過年度生、中学新卒者はごくわずかでした。ほとんどが働きながらの就学が社会人としては先輩がかりでした。学力は決して高くはありませんが、皆それなりの目的意識を持っていました。こうした生徒たちに対し、その生活史や現況を理解せず、教壇から一方的に教えるというあり方は通用しない世界でした。人間としてお互いに尊重しあうということが大切だったと思います。職員室も生徒の現況について話ができるゆとりがあり、生徒たちも頻りに職員室に入り込んでいました。こうした、生徒一人ひとりの人格を大切にしたい教育のあり方と、それを支える職場の存在は、私の教師生活の原点となりました。

退職前に勤めた定時制高校に入学する生徒たちは、昔と違い、中学新卒の生徒がほとんどでした。中学時代に不登校だった生徒が極めて多く、昔の定時制とは随分違った雰囲気でした。特に、入学当初は学校生活に適應できず、登校しても教室に長くいることはできない生徒が目立っていました。仕事に就くこともなく、経済的にも厳しい環境に置かれていました。彼らは、小中学校時代、学校生活の枠からははずれてしまっていたといえます。今、50年前に比べ、不登校生徒数は激増し、いじめの実態も同様です。全体の生徒数は激減し、教育設備等教育環境は改善されているのに、この実態はどのように説明したいのでしょうか。

冒頭に書いたように、今、教育現場のあり方が問われています。昔、識者から聞いた「学校という職場は極力水平であるべきだ」という言葉が強く心に残っています。それに反し、いまは校長を頭に縦組織が形成され、上意下達の学校運営と報告義務の煩雑さが思惑し、職場を形作っています。加えて、パソコン等機器に向かう時間の多さが、生徒一人ひとりを大切にしたい自由な教育論議を困難にし、職員室を近寄りたがたいものになっています。

「不登校」「いじめ」「ブラック校則」等子どもたちを取り巻く克服すべき課題は山積している。教育はだれのためにあるのか、自明であるこの教育の原点に立ち戻り、教育の再生を図る必要がある、といえます。

大きなモノに見守られること

殿町シネマ実行委員会 事務局長 川井田 博幸

私は、直方市の西部に位置する山あいの小さな集落で生まれ育った。山部の神子谷(みこたに)と呼ばれていたが「正式には「神子谷」という地名は無かったのではなからうか。神子谷と呼称されるだけであって、周りは墓と火葬場に囲まれ、そこは、いかにも人間の生と死を橋渡りする神の依り代(よりしろ)で、今も言へば神聖な場所であった。40戸ほどの一戸建ての狭い市営住宅が出来、そこに抽選で幸運を掴んだ若い人たちが夫婦で入居した。私の家族も多くの国鉄労働者たちとそこを住処とした。

幼少期から少年期ののびのびとそこで過ごした。周囲は山に在り谷在り、池や小川が存し、墓地も格好の遊び場として子どもたちにとっては掛け替えのない場所だった。池や川では、魚獲り、山では鳥を捕まえるための罟を仕掛け、降り積もった雪をかき分け、藪に踏み入るのが、冬の楽しみだった。しんと、静まり返った冬の敷中には、ただ自分の足音だけが聞こえ、日常とは違う不思議な世界が広がっていた。

春から秋は、池の水面にウキを浮かべ、ヘラブリナの呼吸を聴いていた。悪さをすれば叱られ声をかけられることも多かった。大人は、強い存在ではあったが、決して怖い存在ではなかった。大人たちは、地域で熱心に働いていた。周囲に小さな畑を作り、「こえた」を担ぐ大人の姿は、どこかのどかで、安心感を誘った。そんな大人たちに囲まれ、自然に抱かれた環境の中で、生きていくのであるから、小さい者には不安は無かった。

遊ぶ子どもがいて、働く大人たちがいる。その顔がしっかりと見えて、そこに自然がある。まさにこれが、教育の素顔ではなからうか。私たちは、学校に行くことだけで教育を受けているのではない。遊ぶ子どもを見守る大人がいて、そこに教育がしっかりと根を下ろすのではないだろうか。いま、小中学校の不登校の生徒たちが、全国で25万人と言われている。行き場を失った子どもたちは、遊び場を探している。それを見守る大人たちを探している。「助けてください」と悲鳴を上げている子どもたちを救い、手を差し伸べるのは、我々大人であることを決して忘れてはならない。今から何を始めるのか、我々に残された時間は少ない。